

光と風に寄せて

保富康午

(故人 十三回生)

僕は眠る 青空のしとねに

光よ 風よ わがすべてよ

鉄道馬車の笛を吹け

はる 早春の野面の笛を吹け！

序の歌

旅路にひとり夢を見たー

光よ 風よ おまへたちの

なんとはなばなしい饗宴であつたか

歌はためらひがちに

とほどほしい季節の憂愁のかけに

僕をいざない歌はすもの

〈旅愁ではない 戀でもない〉

歌はためらひがちに

すべてゆく 思ひ出の河を

そんなにも青い流れで あつた

そんなにも遠い流れで あつた

ああ消えがての想ひを追つて

虹色に降りしきる 早春の音階に

もう身づくろひしやうともしない僕の歌

ためらひがちに しかし すなほに

悔恨のへりをかゞりながら

鳩よ！ 泪ぐんだ白い翼に

遠いたよりを聴かせておくれ

あのなつかしいマドリガル

僕の歌は どこへ行つた

ためらひがちな足どりで

僕の歌は どこへ行つた？

閑雅な午前に

うす白い記憶のはなびらが

漂つて行つた 赤松の林の上を

深い瞳に 支へた たゆたひの《刻》を

僕は 静かに 再び 青空に放つ

とほいとほい のぞみたちが

ふと一せいに 花を開く

そんな 気まぐれな 光の笑ひ

そして おまへの笑ひ

かさこそと 散りしいた昨日の病葉わくらばに

手をふりみだす カドリイル

そして 今日の短靴

閑雅な午前に

また ほのぼのと

はなびらが 遠く 漂つて行つた

いとしき人に

花ははまだうすく眠りに粧つてゐるけれど

あなたよ 雲の切れ目のあの青い空！

いつの日からか 同じ陽光ひかりの裡に棲んで

春の嘆きを共にした――

かなしいしらべも 崩れ散つた

ひとひらのはなびらに紅を滲ませて

あなたよ どこへ行かうとするのか

小鳥の村は まだ遠い

ホルンが風を呼んでゐる

あの山ひだに――あゝ、かげる紫――

そしてあなたの泪

一本道をひらひらとしじみ蝶が

横切つた へ眠りのやうに――

いとしき人よ 翅を おひろげ！

五月の風に

僕の気弱いたはむれが　こつそりと
五月の風に　囁いた　〈華やく木陰で〉
光は僕を愛してゐるか　と
僕はパヂヤマを着た少年だった！

雲も飛ばない青空は　なんと淋しい事だらう
すべては流れた　僕の上に
ひとり眠つたハンモックに黄昏どきは訪れて
降りしきつたのは　夢？　そして　枯葉？

花開いた山脈のやまなみ　しばしのほゝえみに

黄いろい小さな花の
あゝ　つゝましい　つゝましい　歓楽！

吹きこぼされた金粉に
優しい紅紫のかげが散つて
花野に　宴は　まつ盛り
―― 打ち震へるか　僕の夢――

風は愁ひを　眠らせて
鳴つてゐるのは　鐘　聖い鐘
ひとひは　暮れた　と

たちあがらう　花野に
よろこびよ　明日も　歌へと

透けるやうなよそほひは　あゝ　母よ
ふたゝびよみがへる　在りし日の悲傷

少年の　懼れある瞳おそめに　光りあれ！

美しいかな　ひとときの　カデンツァ
僕のホツペタ　紅かつた！

花野

ちひさな歌が　ふつふつと
こぼれて散つた　へこの陽光！

〈花の　さしのべる　手よ

訣別

―― 我が最後のソネット――

帰らないだらう　夢は　再び
赤松の林の上に　夕陽の徑に　そよ風に
別れるだらう　僕は

青い空に　白い雲に　そして　少年の日に

またしても　ひそやかな血が　流された！
夏に向ふ太陽よ　その雙手をのべよ
おんみのかげに諸々の歌は積み重ねられた
そして　ひとは　いつか　それを崩さね

ばならぬ

僕は 行くだらう へたしかに！

歌うだらう また 狐ひとり

しかし 昨日の光は 神のもの！

追うな 去つてゆく 風景を

あゝ 再び高鳴る 驛馬車の角笛よ

さらば！ 投げすてる 僕のムギワラ帽子！

☆

☆

☆

詩人の千里山における中学生時代の作「光と風」に寄せて」十七編の中の七編である。戦後間もない物のない時代に、画家の山ノ内タダコさん（現在大和田）がクレヨンでさし絵を描いて薄いピンクの紙で装丁され、父君が題字を書かれたまさに一冊の手作り詩集である。当時豊中中学へは新田を抜けて歩いて通つたものです。幸福だった少年の日々への別れを詩集にまとめ、次ぎなるステップへ進んでいこうとしている情景を想像したくなる詩編です。仮名遣いは原文に忠実に従いました。思春期の幼さを残し、青春期に向かう非凡な詩才を感じます。無類の音楽好きだった雰囲気も漂い、戦争が終わった開放感、野山に花鳥と青空、夢いっぱいの作者と千里山周辺の風景が見えてきます。（編集部）